

共感性が社会的スキル、攻撃行動、および友人関係 満足感を介して抑うつに与える影響

—対人反応性指標を用いた検討—

菊地勇太¹・長谷川晃²

(1 : 東海学院大学大学院人間関係学研究科, 2 : 東海学院大学人間関係学部)

要 約

本研究では、共感性の各側面が対人行動を介して抑うつに影響を及ぼす過程について検討を行った。大学生 202 名(男性 92 名, 女性 110 名, 平均年齢 20.14 歳, $SD = 4.97$)が、個人的苦痛、共感的関心、視点取得、想像性という 4 下位尺度から構成される日本語版対人反応性指標に加えて、社会的スキル、攻撃行動、友人関係満足感、および抑うつを測定する質問紙に回答した。パス解析の結果、個人的苦痛は社会的スキルや友人関係満足感を介して抑うつに正の影響を与える一方、共感的関心と視点取得は、社会的スキルや友人関係満足感を介して抑うつに負の影響を与えることが示された。以上の結果から、共感性は対人行動や友人関係を介して抑うつと関連することが示唆された。また、個人的苦痛は抑うつと直接、正の関連があることが示された。最後に、共感性の変容を通して対人行動や精神的健康を改善する介入方法の可能性や、今後の課題について考察を行った。

キーワード : 共感性, 攻撃性, 社会的スキル, 友人関係満足感, 抑うつ

(2020. 9. 11 受稿 査読審査を経て 2020. 12. 23 受理)

問題と目的

共感性とは、「他者の経験について、ある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念」と定義され、認知的側面と感情的側面といった複数の側面から構成される多次元的概念である(Davis, 1994 菊池訳 1999)。共感性の下位分類については様々なモデルが提案されているが、対人反応性指標(Interpersonal Reactivity Index: IRI; Davis, 1980)によって測定される 4 つの下位分類が採用されることが多い。

IRI は、他者の苦痛の観察により生起される不安や恐怖にとらわれてしまう程度を測定する「個人的苦痛」、同情などの他者指向的感情の喚起されやすさを測定する「共感的関心」、他者の視点に立ってその他者の気持ちを考える程度を測定する「視点取得」、物語などのフィクションの登場人物に、自分を置きかえるよう想像する傾向を測定する「想像性」の 4 下位尺度から構成される。なお、個人的苦痛と共感的関心が感情的側面、視点取得と想像性が認知的側面を反映している(菊地, 2014)。IRI の

原版は英語で作成されたが、日本語(日道他, 2017)に加えて、スウェーデン語(Cliffordson, 2002)、中国語(Siu & Shek, 2005)、オランダ語(De Corte, Buysse, Verhofstadt, Roeyers, Ponnet, & Davis, 2007)、スペイン語(Fernández, Dufey, & Kramp, 2011)、フランス語(Gilet, Mella, Studer, Grünh, & Labouvie-Vief, 2013)にも翻訳され、世界中の研究者によって用いられている。

IRI を用い、尺度間の相関係数を算出した先行研究の結果から、共感性は対人行動を規定する重要な心理的変数であることが示唆されている。例えば、日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(安藤他, 1999)で測定される攻撃性の 4 側面との関連を検討した結果、共感的関心は敵意や身体的攻撃と、視点取得は短気、敵意、および身体的攻撃と負の相関が認められている一方、個人的苦痛は短気、敵意、および身体的攻撃と正の相関が認められた(日道他, 2017)。

また、共感性と社会的スキルとの関連を検討した調査の結果、男子大学生では、個人的苦痛は社会的スキルと負の有意な相関が、視点取得が社会的スキルと正の有意

な相関が認められ、女子大学生では、共感的関心と想像性が社会的スキルと正の有意な相関があると報告された(菊地, 2004)。一方、看護学生を対象とした調査の結果、社会的スキルの諸側面は、個人的苦痛と負の相関が認められ、視点取得と正の相関が認められている(大熊, 2017)。さらに、共感的関心と視点取得は向社会的行動と正の相関が認められている(山内・長谷川, 2019)。

先行研究では、共感性が精神的健康と関連することも指摘されている。例えば、特性不安は個人的苦痛や想像性と正の相関が、視点取得と負の相関が認められる一方、自尊感情は個人的苦痛と負の相関が、視点取得と正の相関が認められている(日道他, 2017)。

以上の結果を総括すると、共感的関心と視点取得は、社会的スキルや向社会的行動といった適応的な対人行動の増加や、攻撃行動といった不適応的な対人行動の低下と関連することが示唆される。一方、個人的苦痛は身体的攻撃の増加や社会的スキルの低下と関連するなど、不適応的な対人行動と結びつきやすいと言える。これらの結果に加えて、視点取得が精神的健康の改善と関連し、個人的苦痛が精神的健康の悪化と関連するという日道他(2017)の結果を踏まえると、共感性の4側面の中には、上記の対人行動を介して、間接的に精神的健康と関連している可能性がある。この過程を想定した理論もあり、例えば岡田(2008)が提唱した親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルでは、個人内要因の1つである共感性が、友人関係行動と友人関係の親密さを介して精神的健康に影響を与えると仮定されている。

しかし、IRIで測定される共感性の4側面が、共感性との関連が認められている、社会的スキルや攻撃行動といった対人行動を介して精神的健康に与える影響については、筆者の知る限り、検討が行われていない。この検討を行うことにより、共感性の変容を介した、精神的健康を改善する介入方法の洗練に繋がる知見が得られる可能性がある。

そこで本研究では、精神的健康の指標として抑うつを取り上げ、共感性の4側面が対人関係を介して抑うつにどのように影響を及ぼすのかについて、大学生を対象とした調査研究によって検討することを目的とする。その際、共感性との関連が指摘されている社会的スキルと攻撃行動に加えて、これらと関連することが予想される友人関係満足感を媒介変数として設定する。なお、共感性と攻撃性の関連について検討を行った日道他(2017)では、相手への直接的な攻撃行動のみを測定しており、他者を

介した間接的な攻撃行動である、関係性攻撃(e.g.,陰口や、会話に入ってきた他者の無視; 磯部・菱沼, 2007)を測定の対象としていない。そのため、本研究では、他者への直接的な攻撃行動である外顕性攻撃に加えて、関係性攻撃についても測定し、共感性、友人関係満足感、および抑うつとどのような関連が認められるのか検討する。本研究で検証を行う仮説は以下の通りである。

仮説1: 個人的苦痛の定義(Davis, 1980)に基づく、この傾向が強い者は、他者の苦痛を観察することによって不安や恐怖にとらわれてしまうために、対人場面で効果的な対人行動を遂行することが困難になると考えられる。実際、先行研究では、個人的苦痛と社会的スキルに負の関連が認められている(菊池, 2004; 大熊, 2017)。そのため、個人的苦痛は社会的スキルと負の関連があると予想される。

仮説2: 共感的関心は、他者への同情・思いやりの感情を抱きやすい傾向を反映しており(Davis, 1980)、向社会的行動と結びつきやすいことが示唆されていることから(山内・長谷川, 2019)、他者との関係を改善させる行動を動機づける要因であると考えられる。実際、先行研究では、女子大学生において共感的関心と社会的スキルに正の関連が認められている(菊池, 2004)。そのため、共感的関心は社会的スキルと正の関連があると予想される。

仮説3: 視点取得は、他者の視点に立ってその他者の気持ちを考える程度を反映しており(Davis, 1980)、この傾向が強い者は、他者の行動や反応を予想することが多いために、対人場面で良好なコミュニケーションをとることができると考えられる(Davis, 1994 菊池訳 1999)。実際、先行研究では、視点取得と社会的スキルに正の相関が認められている(大熊, 2017)。そのため、視点取得は社会的スキルと正の関連があると予想される。

仮説4: 個人的苦痛は短気、敵意、身体的攻撃といった攻撃性の諸側面と正の相関が示されている(日道他, 2017)。この結果や個人的苦痛の定義(Davis, 1980)を踏まえると、個人的苦痛の得点が高い者は、対人場面で動揺しやすいために短気や敵意を抱きやすく、その結果、攻撃行動を起こしやすいと考えられる。そのため、個人的苦痛は攻撃行動と正の関連があると予想される。

仮説5: 共感的関心の定義(Davis, 1980)を踏まえると、共感的関心の得点が高い者は、攻撃を受けた者に対して同情といった他者指向的感情を喚起しやすく、そのような状況が起きることを防ぐために、他者に攻撃を行いにくいと考えられる。実際、共感的関心は敵意や身体的攻

撃と負の関連が認められている(日道他, 2017)。そのため、共感的関心は攻撃行動と負の関連があると予想される。

仮説 6: 視点取得の得点が高い者は、他者と衝突する可能性のある状況において、相手の立場を理解し、寛容になりやすいために、攻撃行動を行いにいと考えられる(Davis, 1994 菊池訳 1999)。実際、先行研究では、視点取得は短気、敵意、および身体的攻撃といった攻撃性の諸側面と負の相関が認められている(日道他, 2017)。そのため、視点取得は攻撃行動と負の関連があると予想される。

仮説 7: 社会的スキルは、「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル(技能)」であるため(菊池, 1988)、このスキルに長けている者は、他者と円滑なコミュニケーションを行うことができ、その結果、友人関係が良好になると考えられる。実際、先行研究では、社会的スキルが友人関係満足感の増加と関連することが示されている(酒井・谷口・相川, 2016)。そのため、社会的スキルは友人関係満足感と正の関連があると予想される。

仮説 8: 攻撃行動は、他者に危害を加え、不利益を与える行動である(佐藤・高橋・杉山・境・嶋田, 2007)。そのため、友人といった他者に攻撃行動を行いやすい者は、攻撃した相手との関係が悪化し、その結果、相手との関係における満足感が低くなると考えられる。このことから、攻撃行動は友人関係満足感と負の関連があると予想される。

仮説 9: 先行研究では、友人関係満足感と抑うつに負の相関が認められている(下野・長谷川・土原・国里, 2020)。このような結果が得られた理由として、友人関係満足感が、得られるソーシャル・サポートの増加と関連することや、直接、感情の改善と結びつくことが挙げられる(酒井他, 2016)。以上のことから、本研究においても、大学生の友人関係満足感は抑うつと負の関連があると予想される。

仮説 10: 個人的苦痛は、他者の苦痛を目にした際に、苦痛や不安といった強いネガティブ感情が喚起される傾向である(Davis, 1980)。このことから、個人的苦痛は精神的健康の低下と関連があると考えられるが、この示唆と一致して、個人的苦痛は特性不安の高さや自尊感情の低さと関連することが示されている(日道他, 2017)。そのため、個人的苦痛は抑うつと正の関連があると予想される。

以上の仮説の検討に加えて、共感性の4側面が対人関係に関する諸変数を介して抑うつに与える間接効果を検

討することにより、共感性が対人関係を介して抑うつと関連するののかについてや、その過程について検討を行う。なお、想像性は現実場面における他者の経験に関する共感を反映していないため、実際の対人関係との関連が想定しにくい(Davis, 1983)。そのため、想像性と他の変数との関連については、仮説を設けず、その関連を探索する。

方法

調査対象者

東海地方にある大学に在籍している大学生 222 名を対象に調査を行った。そのうち、回答に不備があったものを除いた 202 名(男性 92 名, 女性 110 名, 平均年齢 20.14 歳, $SD = 4.97$)を有効回答者とした。

質問紙の構成

日本語版対人反応性指標(Interpersonal Reactivity Index: IRI; 日道他, 2017) 共感性の程度を測定する尺度であり、個人的苦痛、共感的関心、視点取得、想像性の4下位尺度から構成される。全 28 項目に対して、「全く当てはまらない(1)」から「非常によく当てはまる(5)」までの5件法で回答を求めた。本研究において、各下位尺度の α 係数は、個人的苦痛で.78、共感的関心で.77、視点取得で.55、想像性で.80 であった。

KISS-18(菊池, 1988) 初歩的なスキル、より高度のスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキル、および計画のスキルという6領域の社会的スキルを測定する尺度である。全 18 項目に対して、「いつもそうでない(1)」から「いつもそうだ(5)」までの5件法で回答を求めた。尺度の開発者の提案に従い(菊池, 2004)、全項目の合計得点を算出し、分析で用いた。以下では本尺度の得点を「社会的スキル」と表記する。本研究において、本尺度の α 係数は.89 であった。

攻撃性尺度(磯部・菱沼, 2007) 攻撃行動を測定する尺度であり、外顕性攻撃と関係性攻撃の2下位尺度から構成される。全 23 項目に対して、「全然あてはまらない(1)」から「非常にあてはまる(5)」までの5件法で回答を求めた。本研究において、 α 係数は外顕性攻撃で.65、関係性攻撃で.75 であった。

友人関係満足感尺度(加藤, 2001) 友人関係の満足感を測定する尺度である。全 6 項目に対して、「あてはまらない(0)」から「よくあてはまる(3)」までの4件法で回答を求めた。以下では本尺度の得点を「友人関係満足感」

と表記する。本研究において、本尺度の α 係数は.88 であった。

Beck Depression Inventory-Second Edition 日本語版 (小嶋・古川, 2003) DSM-IV の診断基準に基づく抑うつ症状を評価するための自己記入式質問票である。21 項目からなり、4 件法で回答を求めた。全項目の合計得点を算出し、分析で用いた。以下では本尺度の得点を「抑うつ」と表記する。本研究において、本尺度の α 係数は.92 であった。

手続き

調査は大学の教室で行った。授業の終了後に、受講者に対して調査への参加を依頼した。その際、調査への参加は任意であり、協力することで個人を特定することや成績に反映されることはないこと、回答の途中であっても不都合が生じた場合には止めても構わないこと、調査のデータは数量化されるため、個人の情報が公開される恐れはないことを説明した。これらの内容に同意した者に対して、質問紙に回答を求めた。なお、カウンターバランスをとるために、KISS-18, IRI, 攻撃性尺度, Beck Depression Inventory-Second Edition 日本語版, 友人関係満足感尺度の順番で質問紙を綴じ込んだ冊子と、その逆の順番で綴じ込んだ冊子の 2 種類を配布した。本研究は、東海学院大学「人を対象とする研究」の承認を得た上でとり行われた(ID 番号: 2019-12)。

統計解析

以下のパス解析以外の分析は IBM SPSS Statistics 23 を用いて実施し、パス解析は Mplus 8.3 を用いて実施した。各変数の性差については t 検定で検討を行い、変数間の関連については相関係数を算出して検討を行った。共感性が抑うつを強める過程についてはパス解析で検討

を行った。また、このモデルにおいて、共感性の 4 側面が抑うつに影響を及ぼす過程について、ブートストラップ法を用いて検討を行った(リサンプリング回数 10000 回)。なお、95%CI はバイアスを修正した値 (bias-corrected bootstrap) を用いた。欠損値については、パス解析以外の分析ではペアワイズ法を用いて処理を行い、パス解析では完全情報最尤推定法を用いて処理を行った。

結果

Table 1 に全有効回答者と、男性および女性の各尺度の記述統計量を示した。対応のない t 検定を行った結果、男性の方が外顕性攻撃の得点が高いことが示された ($t(196) = 3.05, p < .01$)。

Table 2 に年齢と各尺度間の相関係数を示した。年齢と個人的苦痛, 社会的スキル, および抑うつに正の有意な相関が得られた。以降の分析で外生変数となる IRI の 4 下位尺度と、従属変数となる抑うつとの相関については、個人的苦痛のみが抑うつと正の有意な相関が認められ、IRI の他の下位尺度は無相関であった。

次に、共感性が社会的スキル, 攻撃行動, および友人関係満足感を介して抑うつに及ぼす影響について、パス解析を用いて検討した。仮説で示した通り、本研究では、基本的に共感性の 4 側面が対人行動に影響を与え、その結果、友人関係満足感が変化し、最終的に抑うつに影響を与えることを想定した。そのため、共感性の 4 変数から社会的スキル, 外顕性攻撃, および関係性攻撃に、これらの対人行動の 3 変数から友人関係満足感に、および友人関係満足感から抑うつにパスを引いた。また、仮説

Table 1 全有効回答者と、男性および女性の各尺度の記述統計量

	全有効回答者			男性			女性		
	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
個人的苦痛	198	22.78	4.97	90	22.09	5.11	108	23.36	4.80
共感的関心	199	23.11	4.91	90	22.88	5.28	109	23.29	4.60
視点取得	199	21.66	3.79	90	21.94	4.14	109	21.42	3.46
想像性	199	22.49	5.48	87	21.99	5.87	109	22.89	5.15
社会的スキル	201	52.82	10.95	91	52.55	11.47	110	53.08	10.55
外顕性攻撃	198	25.56	7.41	90	27.28	6.80	108	24.12	7.63
関係性攻撃	201	20.06	5.06	92	19.72	5.33	109	20.34	4.82
友人関係満足感	194	9.23	4.11	88	8.88	4.53	106	9.58	3.71
抑うつ	193	15.57	10.81	91	16.02	10.32	102	15.16	11.26

Table 2 尺度間の単純相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 年齢									
2. 個人的苦痛	-.15 *								
3. 共感的関心	.03	.40 **							
4. 視点取得	.03	.08	.52 **						
5. 想像性	-.03	.37 **	.32 **	.31 **					
6. 社会的スキル	.14 *	-.29 **	.17 *	.31 **	.02				
7. 外顕性攻撃	-.10	-.15 *	-.20 **	-.10	.03	.00			
8. 関係性攻撃	-.02	.21 **	-.06	.10	.22 **	.06	.30 **		
9. 友人関係満足感	-.09	.05	.30 **	.21 **	.14	.43 **	-.05	.22 **	
10. 抑うつ	-.15 *	.21 **	-.10	-.08	.04	-.41 **	.25 **	.05	-.28 **

** $p < .01$, * $p < .05$.

10 に示した個人的苦痛が抑うつに与える直接効果など、共感性の各側面が抑うつと直接関連している可能性があるため、共感性の4変数から抑うつにパスを引いた。さらに、共感性の各側面が、今回測定した対人行動の3変数を介さずに友人関係満足感と関連している可能性や、対人行動の3変数が、友人関係満足感以外の対人関係の変化を介して抑うつと関連している可能性もあるため、共感性の各変数から友人関係満足感へのパスと、対人関係の3変数から抑うつへのパスを引いた。なお、年齢と性別の影響を統制するために、これらの2変数から共感性を除くすべての変数にパスを引いた。それに加えて、共感性の変数間や、対人行動の変数間には、一部に有意な相関があり (Table 2 参照)、また、各概念が類似しているため、外生変数間と、社会的スキル、外顕性攻撃、および関係性攻撃の誤差変数間に相関を仮定した。このモデルは飽和モデルであるため、適合度は算出されなかった。その結果を Figure 1 に示した。

個人的苦痛は関係性攻撃と抑うつに正の影響を与え、社会的スキルに負の影響を与えた。共感的関心は社会的スキルと友人関係満足感に正の影響を与え、関係性攻撃に負の影響を与えた。視点取得は社会的スキルに正の影響を与えた。想像性は外顕性攻撃と関係性攻撃に正の影響を与えた。社会的スキルは友人関係満足感に正の影響を与え、抑うつに負の影響を与えた。外顕性攻撃は抑うつに正の影響を与えた。関係性攻撃は友人関係満足感に正の影響を与えた。友人関係満足感は抑うつに負の影響を与えた。

共感性が社会的スキル、攻撃行動の2側面、および友

人関係満足感を介して共感性に影響を与えているのか検討するために、ブートストラップ法による媒介分析を行った。その結果、個人的苦痛は社会的スキルを介して抑うつに正の影響を与え (標準化間接効果 = .119 [.044, .225])、社会的スキルと友人関係満足感を介して抑うつに正の影響を与える一方 (標準化間接効果 = .030 [.004, .070])、関係性攻撃と友人関係満足感を介して抑うつに負の影響を与えることが示された (標準化間接効果 = -.009 [-.034, -.001])。¹

共感的関心は社会的スキルを介して抑うつに負の影響を与え (標準化間接効果 = -.058 [-.138, -.011])、社会的スキルと友人関係満足感を介して抑うつに負の影響を与え (標準化間接効果 = -.014 [-.044, -.002])、友人関係満足感を介して抑うつに負の影響を与える一方 (標準化間接効果 = -.045 [-.119, -.005])、関係性攻撃と友人関係満足感を介して抑うつに正の影響を与えることが示された (標準化間接効果 = .010 [.001, .036])。視点取得は社会的スキルを介して抑うつに負の影響を与え (標準化間接効果 = -.070 [-.147, -.021])、社会的スキルと友人関係満足感を介して抑うつに負の影響を与えることが示された (標準化間接効果 = -.017 [-.054, -.001])。想像性は外顕性攻撃を介して抑うつに正の影響を与えることが示された (標準化間接効果 = .042 [.006, .102])。なお、IRI の4下位尺度が抑うつに与える総合効果は、個人的苦痛が.288

¹ 媒介分析の結果、標準化間接効果が有意であった場合にも係数が弱い値であったため、正確を期するために少数第3位の値まで表記した。また、[]内の数値は95%信頼区間を示している。

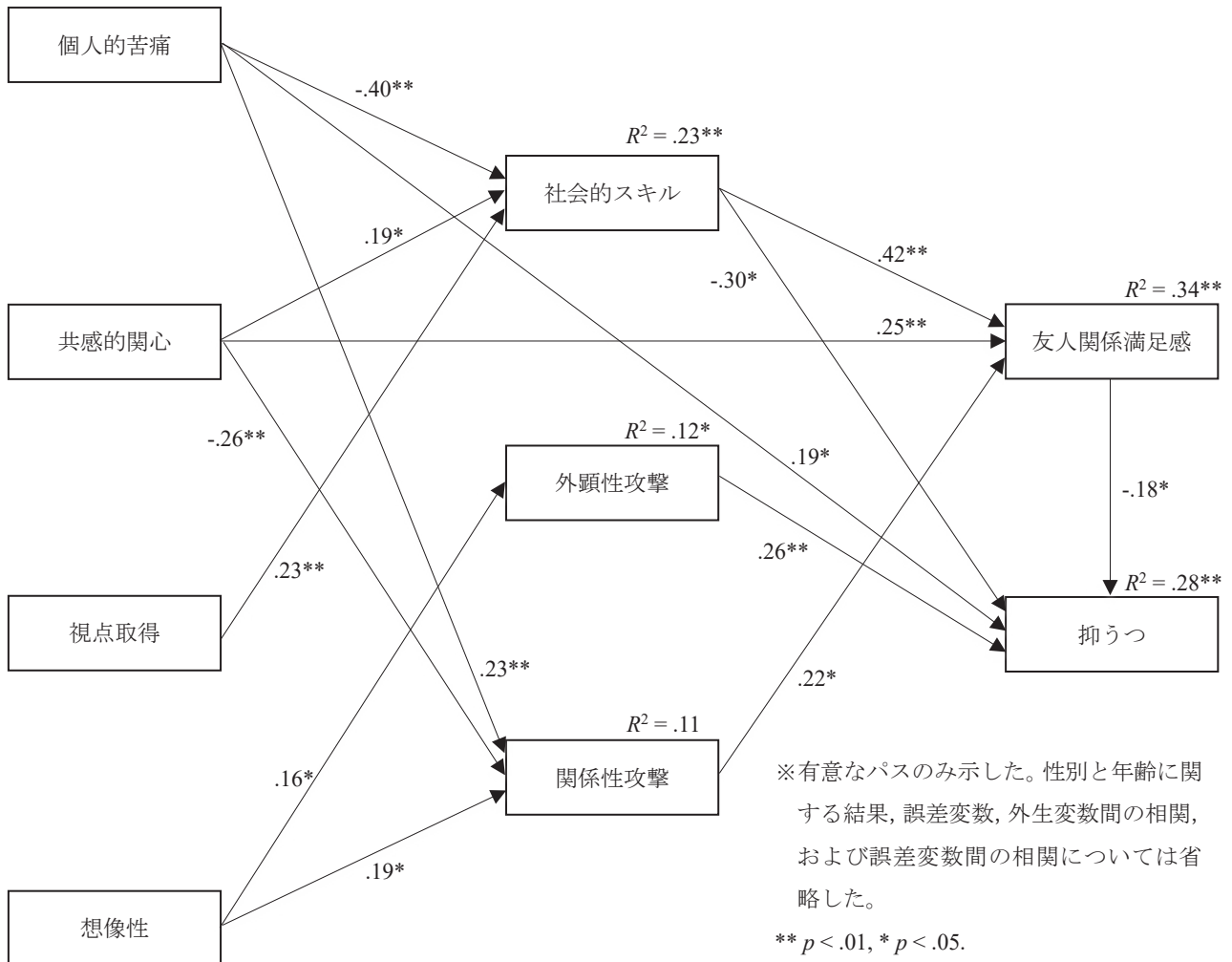


Figure 1 パス解析の結果(N = 193)

[.106, .472], 共感的関心が $-.230[-.422, -.036]$, 視点取得が $.024[-.182, .235]$, 想像性が $.002[-.166, .163]$ であった。

考 察

本研究では、共感性の4側面が対人行動を介して抑うつに及ぼす影響について検討を行った。以下では、パス解析の結果に基づき、仮説の検証を行う。

まず、個人的苦痛と社会的スキルに負の関連が認められ、仮説1が支持された。この結果は、個人的苦痛と社会的スキルに負の関連が認められた先行研究の結果と一致する(菊池, 2004; 大熊, 2017)。個人的苦痛の定義(Davis, 1980)に基づくと、この傾向が強い者は、他者の苦痛を観察することによって不安や恐怖にとらわれてしまうために、対人場面で効果的な対人行動を遂行することが困難になると考えられる。

また、共感的関心と社会的スキルに正の関連が認めら

れ、仮説2は支持された。この結果は、女子大学生において共感的関心と社会的スキルに正の関連を示した菊池(2004)の結果と一致する。共感的関心は、他者への同情・思いやりの感情を抱きやすい傾向を反映しており(Davis, 1980)、向社会的行動とも結びつきやすいことが示されている(山内・長谷川, 2019)。以上のことから、共感的関心は他者との関係を改善させる行動を動機づける要因であり、このことが効果的な社会的スキルの遂行と結びついているのだと考えられる。

次に、視点取得と社会的スキルに正の関連が認められ、仮説3が支持された。この結果は、視点取得と社会的スキルに正の関連を示した大熊(2017)の結果と一致する。視点取得は、他者の視点に立ってその他者の気持ちを考える程度を反映しており(Davis, 1980)、この傾向が強い者は、他者の行動や反応を予想することが多いために、対人場面で良好なコミュニケーションをとることができると考えられる(Davis, 1994 菊池 1999)。

続いて、個人的苦痛は関係性攻撃に正の影響を与えていたが、外顕性攻撃とは無関連であった。そのため仮説 4 は一部支持された。単純相関では、個人的苦痛は外顕性攻撃と負の相関が認められており、個人的苦痛と身体的攻撃との正の関連を見いだした日道他(2017)と逆の結果であると言える。先行研究では、個人的苦痛は短気や敵意に加えて特性不安とも正の相関が認められており、個人的苦痛との相関は特性不安の方が強い(日道他, 2017)。そのため、個人的苦痛の得点が高い者は、短気や敵意を抱く一方、相手からの報復も恐れるために、外顕性攻撃を行わず、比較的報復を受けにくい、無視や悪い噂を流すといった関係性攻撃を行うのだと考えられる。

さらに、共感的関心は、関係性攻撃と負の関連が認められる一方、外顕性攻撃とは無関連であり、仮説 5 は一部支持された。共感的関心と身体的攻撃との負の関連を見いだした日道他(2017)の結果と一致して、単純相関では、共感的関心と外顕性攻撃に負の相関が認められた。しかし、パス解析では共感的関心と外顕性攻撃との間に有意な関連が認められず、この関連は、他の共感性の下位尺度の影響を統制した場合に認められない程度の強さであったと言える。

共感的関心の定義(Davis, 1980)を踏まえると、共感的関心の得点が高い者は、攻撃を受けた者に対して同情などの他者指向的感情を喚起しやすく、そのような状況が起きることを防ぐために、他者に攻撃を行いにくいと考えられる。その際、より衝動的な攻撃である外顕性攻撃(項目例: 思わず暴力を振るってしまうことがある)よりも、比較的衝動的ではない攻撃である関係性攻撃(項目例: 腹を立てた相手の悪口を、その人がいないところで他の人に話す)の方が抑制されやすいのだと考えられる。

一方、視点取得は攻撃行動の 2 側面と無関連であり、仮説 6 は支持されなかった。この関連は、単純相関においても有意ではなく、視点取得と身体的攻撃に負の関連を見いだした日道他(2017)の結果と一致しなかった。使用した尺度やサンプルの属性の差といった観点から、さらなる検討を行うことが求められる。

友人関係満足感に対しては、共感的関心、社会的スキル、および関係性攻撃が正の影響を与えた。社会的スキルと友人関係満足感に正の関連が認められたことから、仮説 7 は支持された。社会的スキルは、「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル(技能)」であるため(菊池, 1988)、このスキルに長けている者は、他者と円滑なコ

ミュニケーションを行うことができ、その結果、友人関係が良好になるのだろう。このような友人関係の良好さが、友人関係満足感に反映されたのだと考えられる。

一方、攻撃行動の 2 側面は友人関係満足感と負の関連が認められず、逆に関係性攻撃と友人関係満足感に正の関連が認められた。以上より、仮説 8 は支持されなかった。関係性攻撃は、他者との会話を介した攻撃が中心であるため(磯部・菱沼, 2007)、必然的に、友人との円滑な関係が必要とされる。そのため、関係性攻撃を行いやすい者は、その攻撃と一緒にする友人との関係が良好であり、その関係に満足感を抱いているものと考えられる。

抑うつに対しては、個人的苦痛と外顕性攻撃が正の影響を与え、社会的スキルと友人関係満足感が負の影響を与えることが示された。友人関係満足感と抑うつに認められた負の関連は、仮説 9 を支持する。この結果は、同じ指標を用いた下野他(2020)と一致する。先行研究では、友人関係満足感が、得られるソーシャル・サポートの増加と関連することや、直接、感情の改善と結びつくことが示唆されている(酒井他, 2016)。そのために友人関係満足感と抑うつに負の関連が認められたのだろう。

さらに、個人的苦痛と抑うつに正の関連が認められ、仮説 10 は支持された。個人的苦痛の定義を踏まえると(Davis, 1980)、この傾向が強い者は、他者の苦痛を目にした際に、苦痛や不安といった強いネガティブ感情が喚起されやすいため、個人的苦痛は精神的健康の低下と関連があると考えられる。この示唆と一致して、個人的苦痛は特性不安の高さや自尊感情の低さと関連することが示されている(日道他, 2017)。これらの結果と同じ理由により、個人的苦痛は、抑うつという、別の精神的健康の悪化を反映した変数とも正の関連が認められたのだと考えられる。

なお、共感的関心と友人関係満足感の関連や、社会的スキルおよび外顕性攻撃と抑うつとの関連は、本研究では測定されていない、何らかの対人行動や対人関係が媒介している可能性がある。また、想像性は物語などのフィクションの登場人物の心情を想像する傾向であるため(Davis, 1980)、現実場面での対人行動との関連については想定しづらいが(Davis, 1983)、パス解析の結果、攻撃行動の 2 側面と正の関連が認められた。単純相関では想像性と外顕性攻撃が無相関である点や(Table 2)、上記の、関係性攻撃が攻撃行動以外の要因を反映している可能性を踏まえると、本研究の結果だけで、想像性と攻撃行動に正の関連があると結論づけるべきではないだろう。こ

これらの関連については、さらなる検討が必要とされる。

媒介分析の結果、個人的苦痛は社会的スキルや友人関係満足感を介して抑うつに正の影響を与える一方、共感的関心と視点取得は、同じ変数を介して抑うつに負の影響を与えることが示された。このことから、上記の共感性の3変数は対人行動を介して抑うつと関連することが示唆される。一方、関係性攻撃と友人関係満足感を介した、抑うつに対する個人的苦痛と共感的関心の間接効果は、上記とは正負が逆の値であった。上記の通り、関係性攻撃は、他者に対する間接的な攻撃に加えて、悪口を言い合う他者との関係をも反映していると考えられる。関係性攻撃を介した共感性の間接効果に関しては、関係性攻撃の測定精度の改善を図ってから再検討を行う必要があるだろう。

以上の共感性の各側面が抑うつに与える間接効果は、5%水準で有意ではあったが、どれも弱い値であった。このような結果が得られた理由には、「間接効果は、その値自体は非常に小さいのに統計的には有意になることがよくある。」(村山, 2009, p.6)ということが関連している。さらに、パス解析において、抑うつに対する総合効果が有意であったものは個人的苦痛と共感的関心のみであり、抑うつとの有意な単純相関が認められたのは、個人的苦痛だけであった。本研究で示唆された、共感性が対人行動を介して抑うつに影響を及ぼす過程については、その関連が弱いという点を考慮した上で評価する必要がある。

以上の結果を踏まえると、個人的苦痛を低下させ、共感的関心と視点取得を増加させる介入を行うことにより、抑うつを改善できると考えられる。先行研究では、集団を対象とした介入プログラムを実施することにより、看護福祉系専門学校に通う学生の共感性を変容できることが示唆されている(西村・村上・櫻井, 2015)。この研究では、IRIとは異なる枠組みに基づいて共感性の測定を行っているが、IRIの各下位尺度の得点の変容にも有効である可能性がある。今後は共感性の変容を通して、対人行動や、抑うつを初めとする精神的健康を改善する介入方法について検討を行う必要があるだろう。

本研究には、以下の限界点がある。まず、本研究は対象者がすべて大学生であるため、他の属性のサンプルを対象とした場合にも同じ結果が得られるのか検討を行う必要がある。また、本研究では、すべての変数の測定を質問紙で行っており、参加者の回答の歪みが結果に影響を及ぼしている可能性がある。今後は、対人行動や対人関係を他者評定によって測定するなど、他の測定方法を

用いて、本研究で得られた知見が再現されるのか検討することが望まれる。さらに、本研究では1時点で調査を行ったため、変数間の因果関係については定かでない。今後は縦断調査といった、因果関係を推定できる手法を用いて、変数間の関連を検討することが求められる。

本研究には以上のような限界点があるが、Davis (1980)によって提案された共感性の4側面が、対人関係を介して抑うつと関連することを示した点に特徴がある。本研究で得られた結果は、共感性という、基礎心理学領域で扱われることが多かった要因を、臨床心理学の研究や実践へと橋渡しすることに繋がるだろう。さらなる検討を積み重ねることにより、抑うつを初めとする精神的健康の改善を目指した介入方法を洗練することが望まれる。

引用文献

- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Cliffordson, C. (2002). The hierarchical structure of empathy: Dimensional organization and relations to social functioning. *Scandinavian Journal of Psychology*, 43, 49-59.
- Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *Journal Supplement Abstract Service Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Boulders, CO: Westview Press. (デイヴィス, M. H. 菊池 章夫(訳) (1999). 共感の社会心理学——人間関係の基礎—— 川島書店)
- De Corte, K., Buysse, A., Verhofstadt, L. L., Roeyers, H., Ponnet, K., & Davis, M. H. (2007). Measuring empathic tendencies: Reliability and validity of the Dutch version of the Interpersonal Reactivity Index. *Psychological Belgica*, 47, 235-260.

- Fernández, A. M., Dufey, M., & Kramp, U. (2011). Testing the psychometric properties of the Interpersonal Reactivity Index (IRI) in Chile: Empathy in a different cultural context. *European Journal of Psychological Assessment, 27*, 179–185.
- Gilet, A.-L., Mella, N., Studer, J., Grün, D., & Labouvie-Vief, G. (2013). Assessing dispositional empathy in adults: A French validation of the Interpersonal Reactivity Index (IRI). *Canadian Journal of Behavioural Science / Revue canadienne des sciences du comportement, 45*, 42–48.
- 日道 俊之・小山内 秀和・後藤 崇志・藤田 弥世・河村 悠太・Davis, M. H.・野村 理朗 (2017). 日本語版対人反応性指標の作成. *心理学研究, 88*, 61–71.
- 磯部 美良・菱沼 悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連——印象形成の観点から——. *パーソナリティ研究, 15*, 290–300.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証. *教育心理学研究, 49*, 295–304.
- 菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル——. 川島書店
- 菊池 章夫 (2004). KiSS-18 研究ノート. 岩手県立大学社会福祉学部紀要, *6*, 41–51.
- 菊池 章夫 (2014). さらに／思いやりを科学する——向社会的行動と社会的スキル——. 川島書店
- 小嶋 雅代・古川 壽亮 (2003). 日本版 BDI-II——ベック抑うつ質問票——. 手引き. 日本文化科学社
- 村山 航 (2009). 媒介分析・マルチレベル媒介分析. 村山航 (Murayama, Kou) の日本語個人ページ. Retrieved from <http://koumurayama.com/koujapanese/mediation.pdf> (2021年1月7日)
- 西村 多久磨・村上 達也・櫻井 茂男 (2015). 共感性を高める教育的介入プログラム——介護福祉系の専門学校生を対象とした効果検証——. *教育心理学研究, 63*, 453–466.
- 岡田 涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築. *教育心理学研究, 56*, 575–588.
- 大熊 淳子 (2017). 看護学生の共感性の育成——社会的スキルとの関連からの検討——. *太成学院大学紀要, 19*, 77–86.
- 佐藤 寛・高橋 史・杉山 恵一・境 泉洋・嶋田 洋徳 (2007). 攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *行動療法研究, 33*, 33–44.
- 酒井 智弘・谷口 淳一・相川 充 (2016). 大学生のソーシャルスキルが友人関係満足とソーシャルサポートを媒介して主観的ウェルビーイングに及ぼす影響. *筑波大学心理学研究, 52*, 59–66.
- 下野 有紀・長谷川 晃・土原 浩平・国里 愛彦 (2020). 大学生用ひきこもり親和性尺度の作成. *感情心理学研究, 27*, 51–60.
- Siu, A. M. H., & Shek, D. T. L. (2005). Validation of the Interpersonal Reactivity Index in a Chinese Context. *Research on Social Work Practice, 15*, 118–126.
- 山内 美香・長谷川 晃 (2019). 大学生が認知した両親の夫婦関係が共感性と向社会的行動に与える影響——親の養育態度を媒介変数として——. *東海学院大学紀要, 13*, 89–97.

Indirect associations between empathic traits and depression via social skills, aggressive behaviors, and satisfaction with friend relationships: An investigation using the Interpersonal Reactivity Index

Yuuta Kikuchi¹ & Akira Hasegawa²

¹Graduate School of Human Relations, Tokai Gakuin University

²Faculty of Human Relations, Tokai Gakuin University

Abstract

This study investigated the role of interpersonal processes in mediating the association between four aspects of empathetic traits and depression. Undergraduate students ($N = 202$, 92 men and 110 women, mean age 20.14 years, $SD = 4.97$) completed the Japanese version of the Interpersonal Reactivity Index, which is composed of four subscales; personal distress, empathetic concern, perspective-taking, and fantasy scale. Participants also responded to measures assessing social skills, aggressive behaviors, satisfaction with friend relationships, and depression. The path analysis results indicated that personal distress had positive indirect associations with depression via social skills and satisfaction with friend relationships. Moreover, empathetic concern and perspective-taking had negative indirect associations with depression through identical mediators. These findings demonstrated that empathetic traits are indirectly associated with depression through interpersonal behaviors and friend relationships. In addition, personal distress had a positive direct association with depression. Therefore, interventions focusing on empathetic traits are expected to improve mental health. The future directions for this research are discussed.

Keywords: empathy, aggression, social skill, satisfaction with friend relationships, depression.